

火の舞い下

火の舞い下

水上勉

講談社

火の舞い (下)

昭和四十九年二月二十四日 第一刷発行
昭和四十九年五月二十八日 第四刷発行

著者 水上 勉

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二一

郵便番号 一一二

電話 東京(〇三)九四五―一一一(大代表)

振替 東京三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社国宝社



落丁本・乱丁本はお取り替えます。
©水上勉 昭和四十九年

火の舞い
下

装帧／丹阿弥丹波子

第十章

雨やどりに軒へかけこんできた男が、そのまま、家に住みついたといった形容があてはまった。

金井勇は、「たこ安」の支配人として入店してくると、よく働らいた。朝十時には店にきて、店内の貼り紙や、床のよごれなどを拭いたり、カウンターの洗い物や、汚物を捨てたりして、まるで女のように小まめだった。そうして、これまで出入りしていた小池関係の闇屋を排して、自分の知りあいらしい肉商人や魚行商人を出入りさせた。これまでどおりの鍋はつづけると同時に、肉のいため物や、焼き魚なども出した。これは附近の競争店にとって脅威であつたし、ふくやさだ代やほかの女たちにとって、驚きである。忙がしくなった。これまでのように、のんびりした横着はゆるされなかった。金井は、そのうえ、ずけずけと物を云い、女たちを顎でつかつた。

「えらい人が入ってきたわ」

さだ代は云つた。

「こんなことやつたら、小池はんの時の方がよっぽどよかった。休むヒマもあらへん」

ふくたちも同感であつた。新聞騒ぎで客が減るかと思いきや、たべ物が豊富なので、敬遠するどころか、ひっきりなしに来る。新しい客の大半は、金井がもといた店の知人らしく、年輩者が多か

った。誰いうとなく、金井は朝鮮人だという噂がたった。事実、さだ代やふくもそんな気がした。小池に似て日本語は巧みだけれど、ズウズウ弁のような舌のまわらない発音をすることもあったし、濁音もはっきりしない。

「きつと、朝鮮人やわ」

まち子が、二階でささやいた。

金井は、几帳面によく働いた。女たちは、金井の指示どおり働いているうちに、金井さん、金井さんと馴れていって、少しでも金井によく見られようと思う心も働き、競争するようになった。これは、さだ代にもふくにもいえた。自然と自分の生活を擁護したい気が働いて、そんな風になってゆくのだった。

ある日、風呂へ行つて帰つてくると、ほかの女たちがまだ帰っていないくて、ふくはひとりになった。と、金井が階段口にすわつてタバコをすつていた顔をなごませて、

「あんた、こんなところにもいつまでも働いているつもりですか。とうして結婚しないのですか」
真面目な顔をして訊いた。

「結婚はコリゴリです」

ふくはこたえた。

「旦那さんをもつたことがあるんですか」

金井は驚ろいたようにいって、

「お客さんの中に、どうしても、あんたを世話してくれという人があるんやけど、つきおうてくれま
すか」

金井のくぼんだ眼に光りが走りはじめた。ふくは洗面器と湯タオルを抱えて立っていた。

「いつまでも、ひとりでいたら、女はあかんようになってしまいます。ええ人あったら、仲好うして、くらしの方がなんぼかええか。あんた、そのお客さんときおうてくれないですか」

金井は、いつかい出そうと考えていたことを切り出した口調で、

「あんたの考え一つで仰山錢だんせんももらえるし」

といい、金菌をだしてわらった。

「さだちゃんにもいうたらな、あの子はさばけてて、いっぺんで承知してくれました」

と金井は好色な眼を投げて返事を待ったのだ。

さだ代がいっぺんで許諾した。いったい、何のことなのか。

「さだ代ちゃんが……なに約束しやはったんですか」

「お客さんと寝ることやな」

金井はずばりといった。

「さだ代ちゃん、よろこんで行ってくれてな……えらい仰山の錢もろたそうや」

ふくは金井の言葉をうたがった。だが、そういわれれば、さだ代に不審な点があったと思った。

最初は金井をいけ好かない男だといってたくせに、いち早く、馴れ馴れしくなったのはさだ代である。ふくやきよ子や、まち子は、にんにくくさい金井には馴染めない警戒心をおぼえ、うちとけて話もしなかったけれど、さだ代だけ急速にかわっていた。しかし、それは、さだ代の性来のおおらかさからくるもので、まさか客と関係しているなどということまでは考えなかった。金井が紹介して、さだ代が客と懇ろになった。ふくは、信じられなかったが、もしほんとだとしたらいやなことだった。

「あんたも、まじめなこと考えてたら時勢におくれるし、いまはな、このどんぐりの近所の女ごは

んは、みんな、客にとって……商売してはる……一人だけ、固いこというとったら通用しいひんで……さだ代ちゃんはその点、あつまりしとるわ。紹介した人とすぐ出来てしもて……えらい、さばさばしてる」

「……………」

「考えようによつては、さだ代の生き方は、いちばん、しあわせやで……びいびいしてたかて……女の子は、きたのうなるばつかしやし。男が出てから、さだ代ちゃん、えろ、きれいになったやろ……化粧も上手になったがな……」

金井はますます饒舌になつて、

「あの顔は好かんけど、お客さんによつては、あの女も魅力らしいな。けどわたしはふくちゃんの方が好きや」

金井はにやりとわらつた。ふくは虫ずが走る思いがした。

ふくは軀を固くして考えた。さだ代をだらしなないといつて輕蔑する資格が自分にあるだろうか。自分は、さだ代の世話で田島の子を墮したのである。田島は世間から指をさされる男であつた。主人の反物を盗んで売つたのだ。そんな男の口車にのせられ、ふくは軀をあたえ、結婚を夢みた。それが、一朝にしてくずれ、おろかだつた自分が省りみられた。腹にあつた田島の子を墮したくてかけつけ、助けてくれたさだ代は、恩人だ。ふしだらな自分が、いったい、どうして、そのさだ代を批判できよう。

金井の射るような言葉を、いま、ふくはどのやうにうけとめてよいか、考えあぐねた。

「ふくちゃんは、どうせ、これから誰かにあげんならん軀やないか。処女やいうんならまだしも、経験あるんやったら……あんたかて、淋しいやろ……淋しいのがまんして、びいびいしとるなんて

……阿呆や」

金井はまた好色な眼をからみつかせて、

「いま、いうて、いま返事してくれんならいうやないさかい、よう考えて、さだ代ちゃんと相談して、返事してエな。いうとくけど、四条の会館の女ごはんらはみーんな、お客さんにとって、えらい金をためてるでエ。アパート借りて、電蓄買うて、ドレスやら、着物やらいっぱいもってるのがおる。物事も考えようや。太う短こう生きる生き方と、細う長う生きる生き方もあるけど、どっちにしても、お金がなかったらあかへん。ふくちゃん、あんた、美しゅうなつたら、男はんとろかすで。わいが保証する」

金井はよだれをだしそんな顔をしていった。

「わたしの世話するお客は、ちゃんとした人や。中には中京の織物会社の課長さんかていやはるえ……」

ふくは屈辱感をおぼえた。自分は、売春婦にはなりたくない、と思った。ふしだらはしたけれども、軀を男にあたえて金をもらったことはなかった。お金がほしいばかりに、軀をゆるした経験はなかった。村の冬治をはじめとする男関係はみなそうだったし、十二坊の田野村との関係も、智恵光院での田島との関係も、みな、金銭類はからまつていない。田野村とは淋しさからもつた関係だし、田島とは、結婚するつもりで、こちらが真剣に惚れた。

へうちは……さだ代とはちがう……」

とふくは思った。しかし、金井が、そんなことをずばりという神経にも、空恐ろしいものを感じた。ひょっとしたら、金井が、この店へ入りこんできたのは、「たこ安」を私娼窟にするつもりできたのではなからうか。人の好き、男好きのするさだ代が、まんまと金井にまるめこまれた経緯

も、ふくにはわかる。で、ふくは、さだ代たちが風呂屋から帰ってくると、さだ代だけを二階にょんで、

「金井さんに変なことをいわれたけど、ほんまやろか」

と遠まわしにきいてみた。さだ代は、風呂あがりのほてった顔をふくにむけて、

「なにいわれたん」と訊いた。

「お客さんとれちゅういわはった」

「キャッチか」

とさだ代はとぼけたようにいった。キャッチとは、バアや一杯呑み屋が蝸集してきたので、どの店も客取りに夢中になり、通る人をキャッチしに表へ出るのが流行している。「たこ安」の女中も、どنگり橋の袂や河原町へ出て、これと目ぼしい男をみるとへおっさん、いっぱい呑んでつてエ……へおっさん、おいしいもンたべてエな、肉やらおでんやらありまっせ……と男のとびつきそうなことをいって、客招きに出る。自分のつれてきた客の売り上げの一割を払いもどすという金井の商法があたつて、女たちはヒマな時間は表へとび出していた。

「そうやないのんよ。寝るお客さん……」

「……………」

さだ代の眼がひかった。

「あんたにも……そんなこといわはったん、いやな人やね」

さだ代は舌打ちした。その表情は、いかにも、金井を軽蔑しているようにみえた。

「あんたが、とつてるさかい、うちにもとれいわはったんよ」

とふくはいった。

「うちが誰と寝てるて……」

さだ代は怒ったようにいった。

「あの人、そんなこと云わはった……」

さだ代は、思いあたることがあるらしく、こめかみをびくびくさせて鏡台の前にすわると、ボンボンいらだたく化粧しはじめた。鏡の中にうつっているふくの顔をみながらさだ代はいった。

「ひっかつたらあかんえ」

さだ代はいった。

「あの人な、四条の会館で、パンパンのボン引きしとってひっかからはった。長いこと警察イ入ってはった……その時に小池はんと知りあいにならはった札つきやんか……あんな人のいうこときいたら、もみくちゃにされるで」

「……………」

ふくはさだ代の半化粧の顔をにらんだ。

「そんなら、あんたがお客さんをとってちゅうのんは嘘なん」

「あてが……誰と寝るかいさ。あては、振っただけや。あの人から世話されて、寝てくれ、寝てくれといわれたこともそらあつたんえ。せやけど、きっぱりことわった。あんないやらしい金井に、わけ前とられて、軀売るなんか……売るんやったら自分で売るわよ、ふくちゃん。好きな人に売るわよ」

さだ代は吐きすてるようにいった。

「お客さんのいわはったことほんまや。うちのお客さんで寺井はんな、あの人がいうてはった。金井は正面にいたボン引きやて……」

正面とは河原町四条から南へ下ったところにある遊廓の町名である。むかしから、このあたりは橋下とよばれて、四流か五流どころの娼婦の町であった。

だいたい、京都は遊廓の多い町である。祇園、先斗町、上七軒などは芸妓町であるけれども、売春婦が法的に守られて、いわゆる公娼の町として栄えた所に、北から五番町、島原、宮川町、中書島、橋下などといったところがある。橋下はその中でも最下等といわれた。不思議なことに、戦争中は鳴りをしずめていたこれらの遊廓が、終戦と共に、早く復興の兆しをみせたのは、ふくや、さだ代だけでなく、不自由な食糧と住宅難に喘いでいる市民にとって意外であったといわねばならない。ふくも、京都へきてから、時々、そうした遊廓の名を耳にした。十二坊でも、智恵光院でも、男たちの口からその名をきくと、不潔な思いが走った。軀を売って生活している同性の姿を想像しただけでも、暗い気もちになったし、何もかも灰にしてしまった戦争が、そのような悲しい町を絶滅させることが出来ず、一番早く復興しているときけば、不思議な気もする。その橋下遊廓で、ボン引きしていた男が、「たこ安」へ入りこんでいる。真面目なつとめ先だとばかり思ってきた小池の店が例の警察沙汰以後、急転直下で墮落していることがわかる。ふくは、そろそろ、この店をやめねばならない時期がきていると思った。

さだ代が、金井のいうままになって、軀を売っていない事実がわかればなおさら、金井の本性が恐ろしくなった。

「いやな人ね。金井って……嘘つきね」

さだ代がふりむいていった。

「あんただまされたらあかんえ。うっかりいうこときいたらな、ひどい目えにあうえ」

「うん」

ふくは鏡の中のさだ代をみて口もとをひきしめた。

「さだちゃん」

ふくはいった。

「うちな、あんたにわるいけど、もう、こんなところ、いやになってきたわ……」

「いやになったて、……どこぞ、つとめるとこあんのか」

「……………」

ゆくあてはどこにもない。といって、若狭に帰ることはいやだった。ふくは、やはり都会で暮れたかった。都会に何とかして根をはって、一人前になって、若狭へ帰りたかった。それまでは、どんなつらいことでも辛抱しよう。

「新聞にいつぱいつとめ先が出てるし」

ふくはいった。事実、この頃何げなく求人広告をみる。そこに呑み屋やバアが誕生するらしく、広告もハデになってきている。

「進駐軍やら、闇屋はんばかりきやはるダンスホールも出けてるそうやし」

この時、さだ代がいった。

「せやけどな……うちらみたいいな踊りも出けんもんは働けへんやろ。ドレスかてあらへんし」

鏡の中の顔を、さだ代はぼんぼんたたく。顔の化粧がすすむにつれて、チャージングになる。ふくは、うしろにいて、それをみている。ふくは、背中を吹きぬけるような風にふるえた。

へああ……さだ代も……

堕ちてゆくのではないかという気がふっと襲った。

ふくは、その夜は、なるべく金井と視線を合わさないようにして働いた。といっても、せまい店だから、視線が合わないように努力しても、何かと、金井に指図されたり、話しかけられることはある。

じっさい、金井という男は、いけ好かなかった。ふくは男ざらいではない。だが、金井のような、のっぺりした眉のうすい、額のせまい、ウチワのような顔はきらいである。

しかし、ほかの女は、金井のいないところでは、あんな男……という眼もし、毛ざらいしてみせなくせに、夜がきて客がたてこみ、猥雑な話に花が咲いたりすると、金井にも打ちとけ、嬌声をあげたりした。不思議なことに、まち子よりも、きよ子よりも、さだ代が、いちばん変貌ぶりが激しいのであった。

へおかしいな……とふくが思いはじめたのは、カウンターに入ったさだ代が、金井とならんで、給仕して廻るちょっとした横顔に、これまでにない活気がみえたことからである。

さだ代は、たしかに化粧も上手になり、客あしらいもうまくなった。十二坊の頃からくらべると色気が増している。

ふくは、その夜は、ひそかにさだ代を観察することに興味をもった。さだ代は、ふくに、見られているとは気づかない。金井にくつついてしよっちゅう笑い興じていた。

客は五人いた。九時すぎる頃から、中京会館の知り合いらしい中年男が二人きた。一人はかっぱくのいい紳士然とした肥満体で、もう一人は、対照的に痩せた、黒い顔をしている。痩せた方は、度のつよい眼鏡をかけ、金井が愛想よく、その男たちの前に立って、酒をつけたり、おでんをよそったりして、まめまめしく応対していたが、どことなく金井が下手に出ているのがふくにも察知された。